

かぐまのちから石

おがーしむがし、こぎす小木須の山の中に、木こりのおじいさんがすんでたんだと。おじいさんは山でたき木を取って、それを町で売って暮らしてたんだ。おじいさんは犬が大好きでな。あか」つつつて、大きな犬をかわいがってた。あかは荷車の綱を引っ張って、おじいさんの手伝いをとてよくしてたんだと。

ある日、おじいさんとあかがいつものように山へたき木を取りに出かけた時なんだ。やぶん中に大きな熊が、倒れてたんだ。いやあー、おじいさんとあかは、びっくりしちゃってな。でもな、あかは「うー」って声をあげながら、熊に近づいてった。熊はただ目をぱちぱちって、してるだけだったんだ。

あかはじりじりって、もっと近寄ってった。熊はな、ぼやあってあかを見てるだけだったと。

「何だか熊の様子が変だぞ！」

って思ったあかは、用心深く近づいてな、よーく見たんだ。そしたらな、後ろの足のつけ根とごに一本、矢が突き刺さってた。そこには、ハエがいっぱい飛んでて、いやあな臭いがしてたんだと。

おじいさんは、

「これは痛がっぺえ。今、取ってやっかんあ」

って、刺さっている矢を引っ張った。でもな、深く刺さった矢はながなが抜けなかった。熊は必死になって、いてえのをがまんしてた。おじいさんは今度は、さっきよりも力を出して、思いつきし引っ張った。

「あーっ」

って熊がうなり声をあげると、やっご矢は抜けたんだ。あかはすぐに熊の傷口のまわりをペろペろって、なめはじめた。おじいさんも腐れかかった傷口をきれえに、拭いてやった。そしたらな、熊は気持ちよさそうに、目をつぶってた。

次の日も、おじいさんとあかは、熊の傷口を拭いたりなめたりしてやったと。それがない、おじいさんは、熊の大好きな木の実や山ぶどうをいっぱい、食べさせてやった。あかはあかで、川に入ってびじよびじよにした体を、熊になめさせてやったんだ。何日

も水を飲んでなかった熊は、大喜びだった。こうして、毎日おじいさんとあかが熊の世話をしたもんでな、熊はすっかり元気になったと。

それがら熊は、あかと一緒にあって、おじいさんの手伝いをするようになったんだ。たき木を取りに行ったり、売りに行ったりすつ時には、あかが荷車の網を引っ張って、熊が後ろから押したんだ。なにしろ力の強い熊が後ろから押すもんで、楽に坂道が登れたくさんのたき木を運ぶことができるようになった。町でも、熊の後押しが珍しいもんで、大評判になってな、おじいさんのたき木は、飛ぶように売れたんだ。こうして、おじいさんたちは人々からかわいがられてな、幸せに暮らしたんだと。

それからしーばらくたって、おじいさん、あか、熊が亡くなつと、村の人たちはおじいさんたちが住んでたあたりを、「あかぐま」って呼ぶようになったと。それがいつの頃がらが、「あかぐま」の「あ」が取れっちゃって、「かぐま」って呼ぶようになったんだと。

村の人たちは、熊の姿によーぐ似た大きな石をさがしてきて、坂の登りっ口に立てたんだ。

そうしてな、重い荷物を荷車に積んで坂道を登つ時には、石の前で手え合わせてな、

「かぐまの熊さんよ、この荷物、後ろから押してくれやあ」
って、お祈りしたんだと。そうすつと、力がもりもり沸いてきて、楽に坂道が登れるって、信じてたんだべなあ。

この大きな石は、「かぐまのちから石」って呼ばれてな、今でも小木須の加熊地区の坂の登りっ口に立ってんだ。

そんなおはなし

おしまい